



考えて

やってみて

次の意欲へ

創造・挑戦・感動

篠山東中

学校だより

1月号 No.10

阪神・淡路大震災追悼行事 ～竹灯籠で形作られた言葉～

過去5年間の、阪神・淡路大震災追悼行事「1.17のつどい」において、竹灯籠で形作られた言葉、その言葉に込められた願い・思いを紹介します。

○2022年 「忘」

震災の記憶を風化させず、決して忘れないという願い。

○2023年 「むすぶ」

犠牲者への追悼の思いと、防災への決意を新たにする人々の思いをむすぶ場にしたいという願い。

○2024年 「ともに」

震災経験者が少なくなる中で、若い世代とともに教訓を継承していくという決意。

2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災地に対し、阪神淡路大震災を経験した神戸から「ともに助け合おう」という思いを発信。

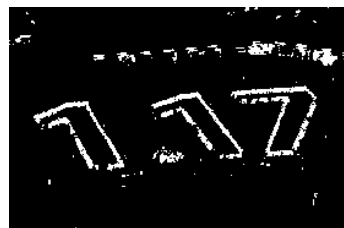
○2025年 「よりそう」

震災発生から30年という節目にあたり、過去10年を振り返り、人と人が互いを思いやる気持ちや、よりそう気持ちを大切にしようという思い。

◎2026年 「つむぐ」

震災の記憶と教訓を、次の世代、未来へとつむいでいくという強い思い。

※つむぐ…ただつなぐではなく、少しずつ丁寧に、時間をかけて積み重ねていくという意味。



今年は、阪神淡路大震災から31年。東日本大震災から15年。能登半島地震から2年を迎えます。被災された皆さまに、心よりお見舞い申しあげるとともに、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申しあげます。

※是非、ご家庭や地域でも、子どもたちに、皆様の1.17を語ってやってください。よろしくお願いします。

私の1.17～風化する記憶をたどって～

地震当日、ようやく学校にたどり着いた私は、その後1週間、避難所運営と生徒の安否確認に追われました。今年度も、風化する記憶を呼び起こし、ここに留めたいと思います。

【避難所運営】

翌18日には、自衛隊や市役所から救援物資（以下、「物資」という。）が届き始め、私の主な役割は、その物資の管理と配給になりました。不定期に、いつくるか・いくつくるかわからない物資を待っては、届くとすぐに品数を数え、記録し、できる限り不公平の生じないように配給準備を整えました。救援物資配給のマニュアル（先輩教師作成）は、以下の通り。

（物資配給マニュアル ～ 当時の資料より ～）

- ・原則として、各人に1個が手わたるようにすること。
- ・各人1個に数が満たない場合は、基本的に次の便を待って配給する。ただし、次の便の目途が立たない状態で配給が滞っている場合は、2分するなりして緊急に配給する。
- ・余分は、できるだけ長持ちする状態で保管し、不足の場合の補てんに当てる。
- ・配給の際は、1列に並び、整然と流れるように指導する。その際は、最低以下の体制を確保する。〔2名で配給する。1名はその補助として荷解きなどを行う。また、列の整理にあたる。〕

物資の種類も多種にわたりました。

思いつくままに、「おにぎり、カップ麺、缶詰、粉ミルク、おむつ、毛布、衣類、防寒具、くつ、シャープペン、鉛筆、ノート、消しゴム等の文房具類・・・（きりがありません）」次から次へ、あらゆる生活用品が届きました。保管場所を確保し、種別ごとに数の管理と整理を行う。体力には自信がありましたが、思っていた以上にハードな作業でした。保存の効かない食べ物は、迅速な配給が鉄則でしたが、次の便を待っているうちに腐らせてしまうこともあり、申しわけない気持ちでいっぱいになったこともありました。

避難者の数が増えるほど、公平性の担保は難しくなりました。何度も子どもや高齢者の優先を説き、理解を求めましたが、受け入れてはもらえませんでした。

今思えば、誰もが切羽詰まっていたのでしょう。子どもも大人も、怪我人も高齢者も、誰もが平等に生きることに必死だったのだと思います。

【生徒の安否確認】

当時学級担任をしていた私は、学校再開までの約1週間。合間を見ては、生徒宅への家庭訪問、校区内の巡回を行いました。まだ余震が頻発していたため、多くの生徒は家族で近隣の避難所に避難していました。その避難所を訪れ、生徒と面会できた時の嬉しさは、今でも忘れることができません。ただ嬉しい反面、この先の生徒たちの生活を想像すると、何と言葉がけをすればよいのか、適切な言葉が見つからず、複雑な気持ちだったことを覚えています。

家屋が無事だった家庭はまだしも、全焼・全壊・半壊の家庭は、その後、日常生活を取り戻すのに、一体どれほどの時間を費やされたことか…。想像を絶するご苦労があったと思います。

（私が担任していた1年4組〔36名〕の家屋の状況等 ～ 当時の学級記録より ～）

全焼家庭	・・・	1名	加西市の親戚に避難	・・・	1名
全壊家庭	・・・	16名	神戸市西区の親戚に避難	・・・	1名
半壊家庭	・・・	14名	※36名全員無事。		
一部損壊家庭	・・・	3名	※後に、親戚に避難していた生徒は転校。		


地震から2日後、出勤した（できた）職員数名で、地震後初の職員会議が開かれました。

そこでは、「非常事態での対応（マニュアル）」に加え、長期戦に備えた、（職員の）3交代24時間勤務（宿直体制）が敷かれました。と同時に、学校再開に向けてのフェーズが示され、1週間後の24日に、学校を再開することが決まりました。しばらく、国・数・英3教科の補充授業を行うことになりました。

当時の資料は、震災から31年経った今もなお、私にいろんなことを語りかけてきます。そして、とても新鮮に、衝撃的に、私の中に飛び込んできます。資料を見るたびに、当時が思い起こされ、無力感を感じながら、だからこそ、何か自分にも役立てることはないかと、使命感にかられ、目の前の仕事に没頭していた日々を思い出します。

この避難所運営を通して、私は人の温かさと醜さの両方に触れました。それはつまり、人が生きるために必死になるとはどういうことなのかを、身をもって知ったということです。この体験を、命の尊さを伝え続けていくことが、生かされた私の使命だと思っています。

（災害点検表 H7.1.24 ～ 学校再開当日の全校集会資料より ～）

		年 組 番 氏名		
A. 火災被害	ア. 全 焼	イ. 半 焼	ウ. 一 部	エ. な し
B. 家屋損壊	ア. 全 壊	イ. 半 壊	ウ. 一部損壊	エ. な し
C. 家 族	ア. 死亡者あり（父・母・祖父・祖母・兄弟・姉妹）			
	イ. 怪我「重症・軽傷」（父・母・祖父・祖母・兄弟・姉妹）			ウ. な し
D. 制 服	ア. あ る	イ. な し		
E. 教 科 書	ア. あ る	イ. な し		
F. 学 用 品	ア. あ る	イ. な し		
G. 体 操 服	ア. あ る	イ. な し		
H. ク ツ	ア. あ る	イ. な し		
I. 避 難 先	住所			
J. 本人に関する	こと	ア. 通学できる	イ. 通学できない	
K. そ の 他	友だちのことで知っていることを記入してください。（登校できていない生徒）			

学校再開後 ～ 生徒の班ノートの記録より（一部抜粋）～

当時、クラスで「班ノート」を作っていました。簡単に言うと、班員の交換日記のようなものです。中学1年生だった生徒たちが、まっすぐな眼差しで、「震災」をどう捉えていたのか。

また、時間があるときにでも、一度読んでみてください。

※感想などあれば、また、いつでも聞かせてください。校長室で待っています。

○2月3日（金）

避難所から家に戻ったとき、ガスボンベの缶を床に置いたら、何もないのに缶が「コロコロ コロ…」と、こっちに転がってきた。しかも、結構スピードがあった。それに台所に入って真っ直ぐ歩こうとすると、坂を上ったような気がして、戻ると加速がつくほどだった。ぼくはこの時、これはまずいと思った。

○2月6日（月）

地震が起きて3週間がたった。ぼくたちは学校に行って、午前中だけ勉強している。

このままだと、春休みも消えて、夏休みも削られる。あ～最悪だ。マラソン大会がなくなったのはいいけど、今の俺は体力が落ちまくっている。おまけにバスケ（部活）もできない。まあ、しかたない。地震のことは、大人になっても忘れないだろう。

○2月7日（火）

17日、寝ているといきなり下からの突き上げがきて、「えっ、地震？」と思っていると、激しい縦揺れと小さい横揺れがきました。縦揺れの時、家がガタンガタン…といって体がつくぐらいすごくて、声もでない状態で、一度、揺れがおさまったと思ったら、次は激しい横揺れがきて、その時、食器の割れる音がしました。天井がギシギシといていたので、このまま落ちてくるかと思いました。揺れが終わると、外で「バンッ」という音と、悲鳴が4回くらい聞こえてきて、空がピカッと光りました。「かみなり？ まさか…。なぜ？」と思いました。

うちの家は窓ガラスが割れたのと食器が割れたぐらいで、父と母もたいしたことないと言っていたのだけれど…。外では、あちらこちらから火の手が上がっていて、すごいと思いました。私はこの時、本震の次は余震がたくさんくると思い、怖くなりました。最大マグニチュード6…。

2、3日して市場に買い物に行きました。どこもすごい被害に遭っていて、びっくりしました。会下山辺りは震度7だったとか…。いつになったら、地震被害が止むのか？はやく余震も終わってほしい…。いつのことかねえ。

2月8日（水）

あの1分間に、神戸の景色が変わってしまった。100万ドルの夜景も、いつ、もとどおりになって帰ってくるんだろう？神戸の変わり果てた街並みに声が出なかった。地震後、何週間も自衛隊の車、パトカー、救急車、消防車が行ったり来たりだったけど、今ではあまり見なくなった。

祖父が地震でケガをして病院に入院しています。毎日学校帰りに病院に行って、看病をしています。オシッコを取ったり、ご飯を食べさせてあげたり、みんなは多分「オシッコを取ったり」と聞いたら、「えー」とか思うかもしれないけど、私はそうは思わない。だって、そうすることは当たり前だから。それに、看護婦さんを見ていたら、とても格好よく見えて。こういう時にみんなの役に立ちたいと思うから。

まだ、余震が来て、祖母はおびえています。こういう人が沢山いるんだと思うと、辛くなってきます。

○2月14日（火）

あと3日で、大地震から1ヶ月がたつ。何か話によると、まだだいぶ、余震が続くようだ。それに、大きい地震も来るみたいだ。せっかく家の掃除をしたのに、またしなければならない。やっぱり、自然の力には勝てないなあと思った。できることなら、ずっと、大きな地震はこないでほしい。でも、ぼくは、みんなに悪いかもしれないけど、こういう体験ができてよかったと思う。

○2月16日(木)

久しぶりの班ノートで、何を書こうか迷っています。地震から明日でちょうど1ヶ月。

なんか長かったような、変な1ヶ月だったな～と思う。家の前を歩いていても、右や左にいがんだ家ばかりで、こわいというより気持ち悪くなってきました。特に、私の家の前のアパートが今にもこわれそうで、赤ラベルが貼ってあるし、震度4か5位の余震が来たらと思うとこわいです。でも、家がメチャメチャになって住めない人や、避難所にいる人に比べたら、家があるだけましと思わないと…。

私の幼稚園の頃からの友だちが引っ越しをしてしまうので、すご～く悲しいよ～お。

それと、小学校6年の時のTeacherが亡くなったのが、ちょっと悲しいです。友だちの話によると、アパートの3階が崩れて4階の住人は助かったけれど、3階の人は生き埋めになったそうです。(Teacherは3階の住人)父は灘区の○○出身だけど、震度7でひどい所だと言っていました。

話は変わるけど、父の親戚から義援金を送ってきてくれました。みんな心配してくれいたんだなあ。私の家族や親戚には、1人も亡くなった人がいなかったし、家は傷んだけど無くすことはなかったので、まだいい方と思わないといけなと思います。

○2月19日(日)

私の家は9階なので眺めは最高だったんですけど、朝は青い屋根(ブルーシート)がいっぱい見えて、美しい夜景が見えません。いつになったら戻るんだろう…神戸は…。

1月16日、「あ～明日学校や」とか思いながらすやすやと眠りについた私でした。そして、AM5時46分。「ゴォー」という音がして、ものすごい揺れが来て、私は揺れてると思っていました。でも、次にすごい揺れが来て、私はオロオロしてパニック状態になっていました。その拍子に食器棚が「ガチャーン」と倒れました。すごい音でした。

やっとおさまって、父が安否を確認しに来て助けてもらい、ようやくみんなのところにたどり着きました。ろうそくの、ほんの少しの光で見たけど、食器棚が倒れ、何もかもがぐちゃぐちゃになっていたのを今でも覚えています。そして、弟と妹と私の3人で、押し入れでずっと夜が明けるのを待っていました。「余震が来るかもしれないから」と母に言われたのです。夜が明けるのが、すごく長く感じました。

○3月 5日(日)

地震が起きてだいぶん経つけど、あのときのことは、絶対に忘れることのできないくらいのことだったから、昨日も余震があったとき、すごく不安でした。

ガス・水が出て、はじめて家にいる気がしています。白いあったかいご飯が食べられて、お風呂にも入れて…。なんかすんごく嬉しくて。もーおにぎりなんて見たくもないです。かたくて、半分腐りかけて、変な臭いがして…。もー絶対におにぎりなんて食べたくないです。

今は水が出て、お米が炊けるからそんなことが言えるけど、いまだに水が出ていない所は、すんごく大変だと思います。

こういう時に人間性が出るから…。

意地の悪い人なんて、なんでも独り占めしたり、自分勝手なことばかりしたり…。

私たち家族が学校に避難していたときも、そんな人がいて、自分は何もしないのに

「食べ物、取っというてネ。」とか、「何か貸して。」とか、人のものばかり使っすぎて嫌でした。

みんなで協力しないといけなと思ったけど、本当に我慢できなくて、お母さんも、従妹のおばさんも怒っていました。ああいう大人にはなりたくないです。

語りかける目

(略)「お母さんを助けて」「助けてお願い」

と、走り回っている大人たちに片っ端からしがみつき、声を限りに叫び続けた。だれにもその叫びは届かなかった。迫ってくる火事に、母を助けられるのは自分しかいないと、哀しい決断を強いられた。

母を叫び続け、懸命に家具を押しわけ、がれきを放り投げ、一步一步母に近づいていった。やっとの思いで、母の手を捜し当てた。姿は見えなかった。母の手を見つけたとたん、その手を握り締めた。その時、少女の手は血まみれになっていることに気づいた。

「おかあさん、おかあさん」「おかあさん」

手を握り締め、泣きながら叫び続けるだけであつた。(略)

兵庫県防災教育副読本

明日に生きる ～“語りかける目”より一部抜粋～